

平成23年度教職大学院派遣研修研究報告書

研修生番号	23K06	氏名	丹野 優子
研究主題 —副主題—	通常の学級に在籍する「軽度の発達障害児」への支援		
所属校	立川市立第二小学校	派遣先	玉川大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>平成19年度から新しい特別支援教育制度が始まり、4年目となる。この制度が始まってから、発達障害について広く知られるようになったが、学級担任をはじめとする教員は日々、指導の難しい子供たちへの対応に追われている。学級担任が、発達障害をはじめとする障害の特性を知り、その特性に応じた指導の工夫をすれば、学級集団の中での個への支援がしやすくなるのではないかと考え、そのことがよりよい学級経営にもつながるのではないかと考え、本研究課題を設定した。</p> <p>この研究は、今後の自分自身の学級経営に活かすことが目的であるが、合わせて対象児自身・担任自身の「困り感」が少しでも軽減し、日常の指導がしやすくなることも目的とした。</p>
II 研究の方法	<p>発達障害は、医学的にはそれぞれ診断基準の異なる障害であるが、小学校の教育現場で見える限り、自閉症を中心とした広汎性発達障害の障害特性や行動特性と重なる部分が多い。そこで、軽度の発達障害児への理解をすすめるためには、自閉症の障害特性を知ることが必要なことであると考える。</p> <p>まず、DSM-IVの診断基準やローナ・ウィングの三つ組の障害としての捉え方、自閉症者の自伝や脳科学、関係発達臨床等からの情報を基に自閉症の障害特性を整理した。</p> <p>それと並行して、高機能自閉症と診断されたA児を対象に事例研究を行い、「担任が学級の中で行える支援の在り方」について考察した。A児の学校生活におけるいくつかの課題となる行動をDSM-IVの診断基準に当てはめ、どのような障害特性を強くもっているかについても整理した。その上で、障害の特性に応じた具体的な手立てを提案し、担任に実際に行ってもらい、児童や担任の変容を記録、分析した。</p>

<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>自閉症の障害特性をさまざまな分野からとらえることができた。事例研究ではA児のいくつかの行動をDSM-IVに当てはめたところ、広汎性発達障害の自閉性障害の診断基準を満たしていることがわかった。そこで、課題となっているいくつかの行動に対して、障害特性に応じた手立てを提案し、実際に行った。取り組みは以下の4点である。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> ① 離席と大声への対応 ② 身辺整理（朝のランドセルの片付け）の習慣化 ③ 運動会の表現への参加 ④ 主体的な教科学習参加への道筋をつけるための試み </div> <p>①に関しては、A児の座席を一番前にすることで、担任とのコミュニケーションが取りやすくなり、離席がほぼなくなった。A児だけでなく、他の配慮の必要な児童も、前方寄りの席に配置するようになり、「配慮の必要な児童は、他の児童の視界に入りにくいようになるべく教室の後方へ」と考えていた担任の認識の変容が感じられた。</p> <p>②に関しては、A児のこだわりであるキャラクターを用いたカードを作成・活用することにより、片付けを習慣化させることができた。こだわりをうまく利用することができることに加え、手順を視覚化すること、3つくらいに単純化して提示することが効果的であることが分かった。</p> <p>③に関しては、なじみのある曲と簡単な振り付けにすること、全体練習の前に学級で事前練習をしておくことで、予想された不適応を起こすことなく練習に参加し、本番を迎えることができた。事前に予測し、対応策を講ずることの必要性が分かった。</p> <p>④に関しては、最近自閉症の原因として注目されているミラーニューロンを活用した取り組みを行った。これからシステムが解明されていけば、有効な手立ての一つになるかもしれないということが分かった。</p>
<p>Ⅳ 考察</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 診断名等にとらわれず、「障害特性をもとに児童の行動を分析して手立てを構ずる」という児童理解の方法の獲得 ・ 児童の行動の意味を多面的にとらえることの大切さの再確認 <p>がこの研究の成果として挙げられる。診断名等の先入観にとらわれることなく、児童の行動の背景や意味を多面的にとらえることの大切さが分かった。そのような力をさらに身に付けていくこと、研究を通して学んだことを現場で活かしていくことが、今後の課題である。</p>